博物館ノート

史跡 阿津賀志山の合戦（国見町）

泰衡が築いた二重堀（模型）

今回は、博物館総合展示「中世」の展示室で特に子どもたちに人気のある、阿津賀志山二重堀模型を紹介します。

阿津賀志山は、伊達郡と宮城県刈田郡との境にある標高二百八十九・四メートルの山で、ここは「伊達の大木戸」ともいわれ、この山から宮城県境に至る山地は、軍事上要害の地でした。

阿津賀志山の合戦は、源頼朝が一一八九年（文治五年）に、奥州に勢力をもっていた平泉の藤原泰衡を追討し、全国を統一するために、軍をおこした戦いです。その主戦場となったのが伊達郡国見町の阿津賀志山で、泰衡方が築いた防塁は、二重の堀と三重の土塁の部分から成ることから、二重堀といわれています。『吾妻鏡』文治五年八月七日の条に記されている「口五丈堀」が、この二重堀です。発掘調査でも幅十五メートルの二重の堀が確認されています。戦いは、頼朝軍の勝利に終り、ここに奥州藤原氏は滅亡することになったのです。

この合戦のようすを模型として製作するにあたり、発掘調査のデータ、鎌倉幕府の事績をしるした史書『吾妻鏡』や、この時代の合戦のようすを表わした絵巻物などから、地形や武器・武具などを調べました。これらのことを総合して合戦の状況を想像復元したこの模型は、二重堀と五十二体の人形、十二体の馬、草木などで構成されています。人形は蠟でできており、五十二体それぞれに異なったポーズをしています。向って左側から攻めている方が頼朝軍です。刀を振りかざし土塁をかけ登る武士、転倒する馬など、動きのあるポーズがとられており、視線を下げて見ると臨場感あふれる光景が広がります。子どもたちが手を触れたくなるような気持がわかります。大事な資料ですので、触れることはできませんが、奥州中世の幕開けともいえる阿津賀志山の合戦に想いをめぐらし、歴史を肌で感じるための、きっかけになればと思います。

今日も子どもたちが目を輝かせながら阿津賀志山の合戦を見学しています。

阿津賀志山の合戦と防塁（二重堀）の復元模型

防塁を越える頼朝軍

二重堀を人馬が駆け進む